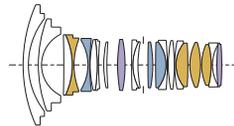


シグマ

15mm F1.4 DG DN DIAGONAL FISHEYE | Art



■非球面レンズ ■SLDレンズ ■FLDレンズ

- 発売日：2024年3月14日
- 実勢価格：33万円(税込)
- Photo&Text：豊田慶記

- 焦点距離・F値：15mm F1.4
- レンズ構成：15群21枚（FLD4枚、SLD3枚、非球面レンズ2枚）
- 画角：180°
- 最小絞り：F16
- 絞り羽根枚数：11枚（円形絞り）
- 最短撮影距離：0.385m
- 最大撮影倍率：0.06倍
- フィルター径：—
- マウント：ソニーEマウント
- 大きさ：104.0 × 159.9mm
- 重さ：1360g

- 共通撮影データ/ソニーα7C R 絞り優先AE ISO100 WB：オート



▲太陽入れ込んだけど、何も起こらず。他の魚眼でも逆光でこれといった不都合はなかったような気も。周辺でもα7C Rの60MPセンサーに負けてないというか、シッカリ結像できてCGみたい。呆れるほどの光学性能…。

■絞りF4 1/640秒 プラス0.7露出補正

▼魚眼感が少し曖昧になるような撮り方をしてみた。モクモクの曇天だと空がもっといい感じになったと思うけれども、これはこれで不穏感が出ていて良いかと。近距離だと少し周辺光量が落ちてるかな？

■絞りF1.4 1/3200秒 マイナス1.0露出補正



超ド級の性能で かつてない星景が撮れそう!

民生用フルサイズフォーマットに対応する交換レンズとしては初となるスペック。また、開放F1.4のレンズとしては世界で最も広角のレンズとなる。

注目の描写は至近側では甘さが出てくるが、魚眼レンズとは思えないほどクリアでキレの良い画像が得られる。シグマには15mm F2.8の対角魚眼レンズがあり、筆者も過去に使っていたが、こちらのレンズよりも写りは良かった。

あまりにも破天荒な描写なので、イメージーションに任せている無理もさせたくないけれど、撮影距離30cm以内の近距離かつ周辺部に、撮影対象を配置させると球面収差のような滲みがあるので「まあそうだね」と現実に引き戻される。

それでも魚眼レンズとは思えないような深度の浅い、背景との分離感のある描写が面白い。

本来の使い方はやはり星景だろう。撮影距離が70cm以上離れていれば目の覚めるようなキレを楽しめる。この描写は唯一無二のものだ。

驚いたのは開放絞りであっても、周辺部に明暗比の大きな対象が写り込んだ場合に色収差がほぼ無いこと。試しに補正ナシでも

撮ってみたが、その程度は非常に軽微で驚かされた。とにかく超ド級の性能であり、これを求めるユーザーにとっては必須のレンズとなりそうだ。

スペックを見て初めに思ったのは、「これはオーロラや星景用だな」だった。というのも、筆者も過去にスウェーデンでオーロラを撮ったことがあるのだけれど、F1.4のレンズが必須となる。

星景撮影では500ルールや200ルールという、星を点として移したい場合に「500÷焦点距離=シャッター一秒時」という目安の式があり、露光秒数を延長すると星を点として捉えたい欲求を叶えられない場合がある。特に空気のキレイなところだと大気のチリのようなものによる拡散が少ないため星がシャープに写り、さらにその判断はシビアになる。

現在は当時よりもさらに高解像なシステムになっているので、コダワりたい人はもっとシビアな撮影条件となる。それに画質的に欲張りしたい場合はISO1600以下を使いたい。そういった願望を叶えるにはF2.0やF2.8のレンズでは力不足なのだ。

今後、このレンズによって今までにないような鮮鋭感の星景やオーロラの写真に出会えるのかと思うと楽しみだ。